
不動心

漣叶夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不動心

【著者名】

Z8553U

【作者名】

漣叶夢

【あらすじ】

漣叶夢です。

今回の小説は、笑いあり涙あり恋愛ありの剣道少年の周りで起こる出来事を小説にしました。

面白くしていく為に、「」を愛読いただきまして、「」を要望・不満が御座いましたら、メッセージをいただければと思います。

入学（前書き）

2032年 不動心。それは剣道、
いや、俺の人生において一番大切な言葉になった。

入学

2010年4月4日、俺は幼馴染みの東藤春乃と、桜の舞う坂道をシワ一つない制服を身に付け、歩いていた。

そう、俺達は今年中学校に上がったのだ！

「ちよっとー連ー連ー！ブレザーの下にカーディガン着ちゃダメだよー！校則違反でしょー！」

春乃是可愛いし文武両道だが少し、というか物凄くお節介だ。

「うつせえなあ…春乃是。なんなんだからモテねんだよ」

俺がドヤ顔で言つと彼女は、更にドヤ顔で俺に言った。

「連はかっこいいし運動できるし頭いいからって、そんなモテるわけじやないじやんーってことは性格が悪いってことだよ！」

俺、二上連の性格が悪いってことは自分でもわかる。何故なら今まで好きになつた子には意地悪しすぎて嫌われたんだから！しかし…

「春乃！てめえの性格の悪さにはかなわねえ！」

「なによー連のハゲ！」

「ハゲてねえ！」

この後、学校につくまで喧嘩続いたのは言わずとも伝わるだろ？…。

…。

学校は小学校よりはるかに大きかつた。

「うわあ…」

春乃と同時に声が出てしまつほどだ。あ、あつち行つちゃつたよ…。俺もクラス分けを見に行くことにしよう。

今年は5クラスしかいなかから少ない人数だ。俺は後ろから3番目だ。同じクラスには懐かしい名前も多い。楽しい学校生活が待つているだろ？。

「漣くん…だよね？」

見覚えのある女の子だ…もしかして…

「梨桜ちゃん？」

一条梨桜ちゃんだ。幼稚園を卒園した直後にお父さんが転勤でフランスに行くのについて行つたらしい。

「久しぶりッ。隣のクラスだね！」

可愛くなつた梨桜ちゃんに抱きつかれ、ニヤついてしまつた俺に懐かしい声たちが声をかけた。

「漣も梨桜も、変わつてねえな？なあ、ひろ。」

「漣は変態になつたのか…梨桜ちゃんは可愛くなつたんじゃね？」

小畠麻美と神島大将だ。麻美は昔から男子と一緒に野球をやつていて、男勝りなところがあつたが…ここまで男口調だと可愛いものもダメになつてしまつ。ヒロも麻美と小さい頃から野球やつててダンツツでモテてたな。相変わらずイケメンだぜッ…

「おお…！麻美は相変わらず男前だな…ヒロは、うん。チビだな。」

「誰が男前だ？ああ？」

「殺すぞ？短足。」

「怖いなあ！おい。な、梨桜ちゃ…つてあれ？」

梨桜ちゃんがいない…と思つたら3年の先輩たちに絡まれてた。

「きみ可愛いね？野球部のマネージャーやらね？」

「いやいや！サッカー部に…！」

「私、陸上やりたいんですけど…！」

なんか、先輩方と盛り上がりつづけているよつなので3人で教室に行くことにした。

教室に入ると、何故か歎声が上がつた。俺は最初、えつ？何で？つて思つたけど理由は直ぐに分かつた。麻美とヒロだ。この二人はリトルリーグの全国大会で麻美がエース、ヒロが4番を受け持つていつから有名なのだ。それに、一人ともこの顔だ。雑誌で取り上げられ知らない人は少ないだろう。

「小室一也、ベラ、めつりや可憐にやん。」

関西弁で元気な男子が麻美に近づいてきて麻美の女の子らしいほつそりとした手を握り大声で喋り始めた。

「あの！小畠麻美やろ！？俺、大阪南のピッチャーやつとつた氷坂
火蓮^{かれん}言うねんけど去年の決勝で投げ合ったんおぼえてる？」

「ああ！ てめえ！ 僕のケツに死球当たやつじやねえか！ ！」

なにやら、知り合いだつたようだ。冰坂は楽しそうだが、麻美は…

お怒りだ。男女が逆転しているように見える。その時唐突に俺の視界の中に逆さになつた机が入ってきた。それに、女子の悲鳴と男子の響めきも聞こえる。俺は慌てて麻美の方を見た。するとどうだろう。両手で机を持ちそれを冰坂に投げようとしている麻美がいた。

冰坂は驚きと恐怖で硬直している。俺は叫んだ、そして跳んだ。

「殺す！」

俺は麻美の持つている机を誰もいない方に蹴り飛ばし、麻美の前に立つた。クラス中が驚きの目で俺を見ていた。麻美とヒロと、今ようやく入ってきた春乃を除いて全員。つまり、37人（担任含め）が俺を見ていた。

「あ……やべえ！ これ、使わないって決めてたのに！」

3人から鋭いツッコミが入った。

「てゆーか、もうホームルーム始まってるんだけどー。」

「すいせん。」

クラスが笑っていた。このクラスならなんとかなりそうだ。

時は経ち、帰りのホームルーム。

「一日でクラス全体が団結してしまった。なんてクラスだ。なんて担任が考えているのも知らず、俺、麻美、ヒロ、春乃、ひさ（氷坂のこと、ヒロが付けたあだな）は部活のことで盛り上がりつついた。

「マジかよ！お前ら3人とも野球部かよ！」

「3人じゃなくて4人よ！失礼ね、漣のハゲ。」

「春乃も！？てか、ハゲじゃねえ！」

「違うわよ！梨桜ちゃんよ！マネージャーで入るの…」

「梨桜がいるなら頑張れるぜ…」

ヒロの安心したような声を聞き、5人は笑顔になっていた。

「あれ？」

ひさが首を傾げた。

「どうした？」

「そういうや、漣と春乃はどこはいんだ？」

「そんなの…」

俺と春乃是顔を見合わせ微笑み合い、同時にこういった。

「剣道に決まつてんじゃん！」

入学（後書き）

今回はここまでです。
時間の許す限り早く更新いたしますので、次回も「愛読頂ければ嬉しいです。

剣道（前書き）

前回までのあらすじ

三上漣は幼馴染みの東藤春乃と共に同じ中学校に進学した。幼稚園の頃からの友だちである一條梨桜、小畠麻美、神島大将と再会し…？

剣道

時は経ち放課後。

「漣！行くわよ！」

春乃に引つ張られ俺は剣道部の体験入部に向かつた。剣道部の部室は2階北校舎にあり3・1の隣にある。3・1のホームルームが終わっていないのに春乃是2階を俺を引きずり回し疾走している。案の定3・1の担任兼剣道部顧問の前川瑞恵まえかわみずえに捕まった。

「コラ！1年生！剣道部に入部希望なら、入部してから走らせてやるから廊下走るな！」

背も高く、整った顔立ち。…そして巨乳。それなのに熱血な教師として有名だ。ああ、美しい。

「はい！！」

俺と春乃是、威勢のいい返事をしてその場をしのいだ。そして隣の剣道部部室に入った俺は、啞然とした。

「え、エアコンディショナー！？」

隣の春乃がそう叫んだ。何故略名を言わなかつたのかは分からないが、春乃がここまで驚くのを始めてみた気がする。この学校の部室には全部こんなものがついてるのか！？暑いところで耐える根性はいらないのか！？と、自分のなかで葛藤して^{部室}いた時天国の入口が開き5人の人間が入ってきた。上履きの色（3年が白・2年が赤・そして俺等1年が黄色と決まっている）から3年生であることが分かつた。4人はチャラチャラとしていて中学生とは思えないくらいだった。マジイ〜超チャラいんですけどお〜つてぐらいだった。でも、俺はそんな奴ら興味ない。あの人は居ないのだろうか？俺は、4人に話しかけられていることも知らずに最後の一人に目をやつた。そして、制服を規定通りに着こなし、礼をしてドアをきちんと閉めている人の名を俺は知っていた。話しかげずにはいられなかつた。

「御田村雄一郎さんですね！？」

御田村さんは、小学2年生の時小学生剣道大会全学年の部で優勝して以来1度も負けていないと言われている選手だ。この人に憧れて俺と春乃是5歳の時剣道を始めたのだ。

「そうだけど…君誰？」

「お、俺は1年の三上漣です。御田村さんに憧れて剣道はじめました。」

「そ、なんだ。」

引いていた気もするが、氣のせいだろ？。

「へえ、お前剣道やってたんだ。」

「あ、はい。」

怖かつた先輩達に話しかけられた。なんだ…この人たちも剣道好きなんだ。怖い人だと思ってたけど意外と良い人達じゃん。

なによ…漣の奴。御田村先輩達と話しかけてさ、女子の先輩はないのかしら…1人だったら絶対ソフト部行つてやるんだから。だいだい、なんであいつの制服姿にときめかなきゃなんないのよ…。ホント意味分かんない！あ、誰か入ってきた…じょ、女子の先輩だツ！

「あ、入部希望かな？それともマネジ？」

マネージャーなのかな？この人…。

「にゅ、入部希望ですツ。せ、先輩はマネージャーさんですか！？それとも…」

「部員だよー！一応女子の方では部長かなあ」

ぶ、部長さん！？こんなにふわふわしてて可愛い人が！？羨ましい！！！！

「部長さんなんですかツツ！すゞいですツ！」

「ふふふ… そうかなあ？あなたお名前は？」

「1年の東藤春乃です！」

何か圧倒的な強さを感じた。この人はできる…絶対に。

「まあ入部してくれるの楽しみだわあ」

「はいツ」

「この人にだけは逆らつちゃいけないわ。気を付けなくちゃ。」

全体的にいい雰囲気だなこの部活。先輩方もいい人ばっかだし…春乃は女子の先輩と打ち解けてるし。でもまだアイツが来てない…まあすぐに来るだろ。

「それにも…他に1年は来ないのか?」

「あ、多分俺のライバルが来ると…」

バンツツ

勢い良く重い部室のドアが開いた。アイツだ。

「入部希望だ。」

剣道（後書き）

試験やら塾やらに追われ更新がおろそかになってしましました。これからはなるべく早いペッチで書いていきますのでプロジェクトお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8553u/>

不動心

2011年10月9日03時52分発行